

春昼遊戯

「鏡花原作『春昼』『春昼後刻』より」

中澤日菜子

登場人物

水野民也 小説家

安斎常市 民也の担当編集者

藤村源信 海辺の村の住職

玉脇 滯 村に住む女性

宇津木光子 滯の世話をする若い女性

柴田繁雄 シルバー人材センター職員

チンドン屋の男

じゃノ目

少年

眷属たち (A～H)

闇の観衆たち (A～E)

村の子どもたち (A～E)

*遠くから波の音が聞こえてくる。舞台の上手に男（水野民也）が、下手にもう一人の男（安齋常市）が立っている。民也は夏服で帽子を目深にかぶっている。

民也 永遠の女、

常市 え、

民也 永遠の女、というものを信じるかい？安齋くん

常市 何ですって？波の音が、

民也 ；視たんだ、僕は

常市 波の音がうるさくてよく、

民也 僕は、何度も。最初は、そう、小学生だった。ある夜、ふと目を覚ますと彼女が窓辺に腰掛け、じつと僕を見つめていた。透明な月の光が滝のように彼女を清め流れ、その姿を僕はきつと、死ぬまで忘れない

*波の音に混じり派手な笛や太鼓の音が聞こえてくる。どんどん音量が増す。

常市 水野先生！聞こえないです！水野先生え！

民也 それから彼女と何度も出会った。交差点の人ごみの向こうで。遊覧船のデッキの端で。満開の夜桜の下で。一度なんてね安齋くん、駅のエスカレーターですれ違ったこともあるんだよ。僕は昇ってゆく。彼女は下ってゆく。手を伸ばせば触れられたかもしれない。でも僕にはできなかった…

常市 待ってくださいいね水野先生、今そつちに、

民也 来なくていい

常市 え、

民也 来なくていいんだ君は。いや…来るべきではないんだ

常市 いやでもだって、

民也 ；彼女は、いったい何者なんだろう…

常市 先生、

民也 前世、それとも来世の約束の…合わせ鏡のように永遠に僕を貫く女…

常市 水野先生！

*波の音、鳴り物、極限まで高まる。舞台中央に女（玉脇滯）が現れる。滯と民也の目が合う。民也、帽子を取る。

民也 お別れだ、安齋くん

常市 行つては駄目です、水野先生！

民也 何故？…全てはここから始まるのに！

常市 先生！

*民也、帽子を空中に投げる。同時に舞台、明転。派手なチンドン屋の群れが笛や太鼓、鉦の音と共に現れる。民也、その群れに飲み込まれてゆく。滯、そんな民也をじつと見つめている。呆然と立ちすくむ常市。暗転。

△1▽

*穏やかな鳥の囀りが聞こえる。溶暗。舞台は一面の菜の花畑。麗らかな春の午後。上手に細い上り坂があり、その横に板塀に囲まれた家が見える。下手に粗末なお堂がある。花畑にぼんやりと立つ常市。手に民也が放った帽子を持っている。と、下手から子どもたちが駆けて来る。はしゃいだ声、上気した頬。中の一人が常市とぶつかり、転ぶ。常市、慌てて助け起こす。

子どもA (泣き出す)

常市 ごめんごめん。怪我してないかい？

子どもA ここ、痛い。(膝を押さえる)

常市 あー。ちよつと擦りむいちゃったねー

子どもB 平気だよ、そんな

子どもC 早く行こうよ

子どもD 始まつちやうよ始まつちやうよ

子どもA 痛いのー！

常市 おうちはどこ？おじさん送つて行こうか

子どもE そうしろそうしろ。おれら先行くから

子どもA やだ！やだやだやだ！

子どもB じゃ泣くなよ。絶対帰るとか言うなよ

子どもA …うん

常市 どこ行くの、みんな

子どもD 駅前！

子どもC 今日おっきなお店が開店すんの！

子どもE ピエロが来んだよ！屋台も出んの！

常市 ああ。やってたね、そういえば

子どもB 早く行こうよ！

常市 大丈夫？足、

子どもA (こくりと頷く)

常市 気をつけてね

***子どもたち、走ってゆく。8歳くらいの少年が一人、ぼつんと残る。**

常市 どうしたの？みんな行っちゃったよ

少年 …蛇が、

常市 へび？

少年 (上手の道の先を指し) あのお家に入ってたよ。とつても大きくて白い蛇

常市 え？え？

少年 おじさん、お家のひとに教えてあげてよ

常市 きみが教えてあげればいいじゃないか。このへんの子なんだろう？

少年 僕は…みんなと一緒にいきたい

常市 でも、

少年 一人は、嫌なの

常市 (少年の強い口調に驚く)

少年 じゃあね、おじさん！

***少年、子どもたちを追って去る。その行方を見ている常市。ため息を一つ吐き、上手に向かう。常市、中腰になったりかがんだりして板塀の穴から家の中を窺う。と、作業服を着て雑草を詰めたビニール袋を持った高齢の男(柴田繁雄)が上手奥から現れる。常市に気づき、息を呑む柴田。続いてビニール袋を振り回し常市の尻を殴りつける。常市、悲鳴を上げる。**

柴田 コンの！コンの！コンの！コンの！コンの変態野郎！

常市 違います！止めて！

柴田 警察呼ぶぞ、コンのオ！

常市 違うッたら！痛い！

***と、上手奥から若い女性(宇津木光子)駆けてくる。**

光子 どしたの、柴田さん！？

柴田 お宅の風呂場覗いてた、こいつ！

光子 え！

常市 違うんです、蛇が、白蛇がお宅に入ってたって、さっき通った子どもが、蛇？

光子 子ども？

常市 二年生くらいなの、蛇じゃありませんよ子どもが、見かけたって行って、それで教えてあげてって頼まれて僕は、

光子 やだー

柴田 ホントかい

常市 嘘吐いたってしようがないでしょう。もー痛いなー…

光子 柴田さん、見てきてくんない？

柴田 そりゃ構わねえけど…

光子 お願い。奥様、あ、濡さん蛇大嫌いなよ。この間も散歩の途中で見かけて、貧血
柴田 そういうことならな

光子 すいません。お勝手、空いてますから

柴田 ん。(歩きかけ) ああ、あんた。とりあえず、スマン

常市 とりあえずって、ちよつとお！(柴田、すたすた去る) …なんだよ…こんなことなら教えないで行きやよかったよ…

光子 ごめんなさい。悪い人じゃないんだけど…

常市 あの家の方？

光子 私は。柴田さんは村のシルバー人材センターの方で、ちょうど今日、庭の草むしり
やってくださってたんです

常市 立派なお宅ですよね…。…ひよつとしてお嬢様？

光子 (笑って) まさか。私は奥様、あ、濡さんの付き添いというかお手伝いを

常市 東京？

光子 え、

常市 ご出身

光子 あ、はい

常市 やっぱり。訛りがなからそうかなーと。あ、僕も東京から来ました。ついさつき
光子 ご旅行？こんな何にもないところに？

常市 いや旅行というか…(民也の帽子を見る) …岩殿寺、というのはあそこの…

光子 (頷く) お墓参りですか？

常市 (淋しそうに微笑む) …まあ…そのようなものですね…

*と、上手から柴田の「うおー!」という野太い声上がる。

光子 ちよつと行ってきます!

常市 気をつけて

光子 (ぺこりと頭を下げ) ありがとうございます…とりあえず(走って去る)

*苦笑を浮かべた常市、下手のお堂に向かう。一礼して上がりこむ。

常市 …ここが…水野先生の…

*常市、ゆつくりと堂内を見て回る。と、目が丸柱に貼られた一枚の懐紙に止まる。

『うたた寝に恋しき人を見てしより 夢てふものは頼みそめてき 玉脇濡』…たまわき、みお…

*常市、歌に見入る。と、背後から中年の僧侶(藤村源信)が近づいてくる。

源信 ご参詣ですか?

常市 あ…。すみません勝手に上がりこんで、

源信 (笑う) いいですよ。寺なんてものは好き勝手に入るものですから、もともと

常市 ご住職様?

源信 一応ね。「様」がつくほど偉いもんじゃありませんけど。どうぞ、お楽になさって。今、お茶でも淹れましょう

常市 お仕事のお邪魔では…

源信 仕事?

常市 お坊様なら…その、お葬式とか…

源信 それが死なんのですわ。こう陽気がいいと、ジジババも、なかなか。産婆と坊主は食いつばぐれないって言いますが、こりやあちよつとヤバそうですね(笑う)

常市 …はあ、

源信 ああすみません。つい。若い方とお喋りするなんて久しぶりだから嬉しくて

常市 若い人少ないんですか、やっぱり

源信 少ないですねえ。かく言う私もつい最近ですよ、この村に戻って来たのは

常市 そうなんですか

源信 親爺に、そろそろ跡を継がないかって言われて。勤めてた会社も、ちょうど早期退職者を募ってましたんでね。これも何かの縁かなあ、と

常市 不景気、ですなえ

源信 まったくです。どこもかしこも…(茶を勧めながら)どうぞ。本物の粗茶ですが
常市 はあ

源信 (笑う)粗茶に、本物も偽物ありませんけどね

常市 (笑う)いただきます

***お茶を飲む二人。雲雀が鳴く。**

源信 …しかしよくおいでになりましたね。こんなボロ寺、ガイドブックにもインターネ
ットにも載ってないでしょうに

常市 実は、あの…。(意を決して水野の帽子を差し出す)…この帽子の持ち主に教えても
らって。…見覚え、ありませんか？

源信 (帽子を見つめる。顔つきが変わる)…水野、さん？…あの水野民也、さん…？

常市 …ご存知でしたか。やっぱり

源信 …失礼ですがご遺族の、

常市 いえ。僕は彼の担当編集者です。あ、水野さんが小説家ということは、

源信 知っています。ご本人が、前に、

常市 そうでしたか

源信 (改まり)軽口を叩いたりして申し訳ありません

常市 気になさらないでください。それよりもあの…。聞かせていただけませんか、水野
民也がここでどんなふう暮らしたか

源信 …

常市 どんなことを喋りどんな表情をしていたか。何を見つめ何を見つめなかったのか…

源信 …あれは事故だと警察からは、

常市 分かってます。僕が知りたいのは死に方じゃない。『彼がどう生きたか』なんです

***二人の目が合う。源信、吐息をつく。**

源信 …さつき『水野さんにこの寺を教えてもらった』とおっしゃいましたね

常市 (頷く)取材旅行だったんです、元々は。ウチが経費を出していて、それで水野先
生から週に一回は簡単な近況報告のメールが。そこにこのお寺のことも、

源信 …

常市 珍しいなと思ひまして。先生は…一人で行動するのが好きなタイプだったので。ち
よつと人見知りというか。照れ屋というか。…それなのにこのお寺には毎日のよう
に通い、しかもご住職ともたびたび話しこんでいる、という…

源信 違いますねそれは

常市 え、

源信 …人見知りや照れ屋、というレベルじゃない。もはや人嫌い。でしょう？

常市 …

源信 挨拶をして無視されなくなったのが、初めて会ってから確か十日目頃。目を合わせ
てくれたのがその数日後で、ふた言以上会話が続いたのは…三週間位経ってからじ
やなかったかな。駐輪場の整理係のじいちゃんだって愛想がいいですよ、水野さん
よりは（笑う）

常市 （笑う）確かに変わった人で…いや作家には変人奇人が多いんですけども、彼はち
よつと…偽悪的、というか、わざと悪ぶって突っ張っているふうなところがあって。

源信 それでよく嫌われたり。編集者にも『水野先生の担当だけは御免蒙る』なんて人も
偽悪的、ね。分かる気がしますよ

常市 根はまっすぐで、なんていうか…少年がそのまま大人になったような純粹さのある
人でした。純粹なだけに、どこかで歪みを自己演出しなければ生きていけなかった
のかもしれない

源信 …

常市 …僕もさんざ怒られたり罵られたり。履いていた靴で殴られたこともあったな…

源信 靴で！？そりゃひどい！

常市 ひどいでしょ？ひどいんですよ。でもそこまでされてなお僕には先生から離れると
いう発想がなくて。先生も半ば呆れて、そばにおいてくれてたんだと思います…

源信 …

常市 （遠くを見やり）ほんとだ…海が綺麗に見える…先生のメールにあった通りだ…

* 間。二人春の海を眺める。

源信 …お名前を…まだ伺っておりませんでした。私は藤村。藤村源信と申します

常市 あ。失礼しました。いま名刺を、僕は、

源信 …安齋さん

常市 …え？

源信 …安齋常市さんでしょうか？

常市 …何故それを、

源信 （深々と一礼）…お待ちしております…

常市 ……どういうことでしょう

源信 お渡ししたいものがあります。少々お待ちいただけますか？

常市 あ、はい、あの、

源信 すぐに戻りますよ

* 源信、下手に去る。しばしばうっとうしている常市。と、お堂の窓から男（チンドン屋の男）がにゅつと首を突き出した。

チンドン屋の男 女、見なかったかえ

常市 （悲鳴をあげる）

チンドン屋 女だよウ。ちっと様子のいいオンナ

常市 びびび吃驚したあ…

チンドン屋 いねえか。全く、どこ行っちゃまったんだか…

*チンドン屋の男、太鼓を叩きながら全身を現す。

常市 あ、もしかしてあの子かな？あそこのお屋敷にいる、

チンドン屋の男 あんなのは女とは言わねえ。ありや娘つ子だ娘つ子。女と娘の違い

もわからぬ、コリヤ困ったお客人

常市 あのねえおじさん、僕はね、ここに来たのは初めてなんだからね、

チンドン屋 天岩戸の昔から、女は女、ほとはほと。怖い怖いほとはほと

常市 おじさん！一応仮にもとりあえずここはお寺なんだから、

*と、どーんと花火の打ちあがる音がする。思わず音の方を向く常市。

常市 花火？こんな季節に？…ああ、駅前のスーパーの（振り向く。男消えている）あれ？

おじさん！おじさん！？

* 源信、ノートを一冊携え、戻ってくる。

源信 どうしました？

常市 あ。あの…チンドン屋？みたいな男が、

源信 チンドン屋？

常市 聞こえませんでした？太鼓の音

源信 全然

常市 変ですよ。お寺にチンドン屋なんて。…夢でも見たのかなあ…

源信 いやでも今日は駅前に大型スーパーが開店する日なんで。あり得なくはないですよ

常市 そうか…そうですよね…

源信 それより。…これを

*源信、ノートを常市に差し出す。

常市 これは…(ぱらぱらとめくって)…水野先生の…メモ…いや日記、ですか？(手が止まる)…なんだ、これ『○□△』?…『○□△』?

源信 …

常市 なぜ先生の日記を源信さんが?どうして僕に?だいたい僕の名前をどうして、

源信 …まあお座りください。…私は本当に不勉強な人間で。学生時代も本など読んだことがなくて。恥ずかしながら水野民也の名前すら知らなかったんです。でもそれがよかつたんでしょかね、かえって…

常市 …

源信 挨拶を交わすようになってから、だんだんここで話していかれる時間が長くなって。いや大したことは喋ってないんですよ全然。美味しい地魚の話とか、どこそこの庭で向日葵が綺麗に咲いていたとか…。ご覧の通りのド田舎ですから人嫌いの先生もさすがに人恋しくて、話し相手が欲しくなったのかもしれませんが(笑う)

常市 …きつと源信さんの人柄に惹かれたんだと思いますよ、先生も…

源信 いやいや…。…そんな風にお付き合いするようになって…一月半も経った頃でしょうか。…先生のご様子が変わって行かれるのに気づきまして…

常市 それはどんな、

源信 …。病気かな、と最初は思ったんです。それで医者を勧めたりもしたんですが…先生は『痛むのは、身体ではない』とおっしゃって…

常市 『痛むのは、身体ではない』…

源信 (手で柱の和歌をなぞり)…身体の痛みより辛いかもしれません…

常市 …

源信 …このノートを持っていらしたのは…事故の前の晩でした。『安齋常市という男がきつと来る。彼に渡して欲しい』と。…私、きつと物凄くひがみっぽい顔してたんでしょうね。先生は『君も読んで構わない』と。…夢中で読みました。読み終わってすぐ、バイクに飛び乗り先生のホテルに駆けつけた…。でも間に合わなかった…。先生は、すでに…旅立たれたあとだったんです…

常市 …

源信 …安齋さん。これは警察にも言っていないことなんです、

常市 …はい

源信 …水野先生は事故や自殺で亡くなったんじゃない。…殺されたんですよ

常市 え、

源信 (手で柱の和歌をなぞり) この女に、殺されたんです…

* チンドン屋の喇叭や太鼓の音が聞こえてくる。

常市 …相手も分かっているのならば、

源信 …言っても信じてもらえないからです

常市 そんなことは言ってみなけりや、

源信 お読みになれば分かります

* 常市と源信見つめ合う。鳴り物、ますます大きく響く。

源信 『夢てふものは頼みそめてき』…醒めない夢は夢じゃない。地獄、と私は思います

常市 …地獄？

源信 …どうぞ一人でゆっくりお読みください。私は町まで用足しに行つて参ります

* 源信、一つ礼をし、去る。一人残される常市。菜の花畑の中にチンドン屋の男と女
(じゃノ目) が現れる。柱に貼られた和歌が浮かび上がる。

常市 (ノートを広げる)…『七月九日。快晴。今日、海で、一人の女に会った』…

* 暗転

△▽

* 溶暗。舞台上は転換し、巨大な○□△が、さながらフレームのように乱立している。
その一つのフレームの中に民也が座り、ノートに何か書いている。波の音が聞こえる。
と、別のフレームの中に日傘をさした漣が現れる。

漣 海を描いてらっしゃるの

民也 (驚いて振り向く)

漣 それとも空？ひよつとして両方かしら…先生

民也 (漣から目が離せない)

漣 …絵を描いていらっしゃるんじゃないのね。ごめんなさい。あたし勘違いしてて。
あそこのお坊さんが『先生、先生』言うものだからってつきり絵がご専門かと、

民也 …

漣 (バッグからスケッチブックを取り出し) あたしも描くんですよ少し。それで…思
い込んでしまったんだわ…

*二人、見つめ合う。

漣 ……何が、見えますか…？

民也 ……え？

漣 ……あたしの中に、何が見えますか、先生…

民也 ……

*と、別のフレームの中から光子が走ってくる。

光子 奥様あ！どこですか奥様あ！

漣 (微笑む) ……奥様はやめてと言ったでしょ、光子ちゃん…

*漣と光子のフレーム暗転。呆然と立ち竦む民也。と、別のフレームに野良着姿の男

女(眷属A・B)が浮かぶ。

眷属A どうしたんだい先生

眷属B 顔色が悪いですよ

民也 ……あの人は誰だ…？

眷属A あの人？

民也 今、そこにいた、日傘を差したあの、

*二人、くつくつ笑う。

民也 何が可笑しい！？

眷属A 先生、

眷属B ……夢でも見なさったかえ…

民也 ……夢…？

*眷属A、Bのフレーム、暗転。再び立ち竦む民也。と、また別のフレームが浮か

び上がる。少年が後ろ向きで泣いている。漣が涙を拭いてやっている。

漣 泣かないの。ね。いい子だから…

少年 ぼくの…ハンカチ…大事なのに…

漣 大丈夫。きっと、そこらに…ほらあった！

*漣、民也を見つめる。

漣 ……ありがとう。拾ってくださいって

民也 え？(慌てて手を見る。白いハンカチをいつのまにか握っている)……どうして、

漣 この子が落としたんですの。さ、もらっておいでなさい

少年 うん！(ぱっと駆け出し、ハンカチを受け取る)ありがとう、お父さん！

民也 お父さん？

漣 …何を驚いてらっしゃるの。あたしとあなたの可愛い息子でしように…

民也 …息子…？きみと僕の…？

*と、別のフレームの中から光子が走ってくる。

光子 奥様あ！どこですか奥様あ！

漣 (微笑む)…奥様はやめてと言ったでしょ、光子ちゃん…

民也 待ってくれ！

*漣と少年、光子のフレーム暗転。呆然と立ち竦む民也。と、別のフレームに買い物帰りらしき男女(眷属C・D)が浮かぶ。

眷属C どうしたんだい先生

眷属D 顔色が悪いですよ

民也 …あの二人は誰だ…？

眷属C あの二人？

民也 今、そこにいた若い女と少年はいつたい、

*二人、くつくつ笑う。

民也 何が可笑しい！？

眷属C 先生、

眷属D …夢でも見なさったかえ…

民也 …夢…？

*眷属C、Dのフレーム、暗転。再び立ち竦む民也。と、また別のフレームが浮かび上がる。文机に向かって書き物をしている漣が浮かび上がる。漣、民也の視線を感じて振り向く。

漣 …嫌な人。いつから覗いてらっしゃったの

民也 いや覗きなんて、

漣 もつともこんな穴だらけの板塀、見るなというほうが無理ですわね (笑う)

民也 …何を書いてらしたんですか？

漣 …歌を、

民也 歌？

漣 書き写しておりました。昔むかしの恋の歌。…ねえ先生。人が人を想う気持ちは、千年前も今も、何も変わりはないのね…

民也 ……きつと永遠に変わらないだろうね。……人が人である限り…

漣 ……人が人である限り…

*と、別のフレームの中から光子が走ってくる。

光子 奥様あ！どこですか奥様あ！

漣 (微笑む) ……奥様はやめてと言ったでしよ、光子ちゃん…

民也 行かないでくれ！

*漣と光子のフレーム暗転。呆然と立ち竦む民也。と、別のフレームに往診の帰りらしき医者と看護師(眷属E・F)が浮かぶ。

眷属E どうしたんだい先生

眷属F 顔色が悪いですよ

民也 ……なぜ見つめることしかできないんだあの人のことを。いつもいつも…

眷属E あの人？

民也 今、そこにいた女性だよ、君たちも見ただろう！？

*二人、くつくつ笑う。

民也 何が可笑しい！？

眷属E 先生、

眷属F ……夢でも見なさったかえ…

民也 ……夢…？

*眷属E、Fのフレーム、暗転。民也、思わずうずくまる。と、また別のフレームが浮かび上がる。赤いヨーヨーを手に持った漣が現れる。

民也 ……僕は君をずっと昔から知っている。……そうだね？

漣 ……(ヨーヨーを突く)

民也 ……そして出会った僕は何とか君に触れたいと思ってきた。だがその願いが叶ったことはない…

漣 ……(ヨーヨーを突く)

民也 ……僕と君には幾重にも因果の糸が絡み付いている。それが前世に繋がるものなのか、それとも来世から伸びて来たものなのか、それは僕にも分からない。ただひとつはつきりしていること、それは……僕は君に、そして君は僕に出会うために生まれてきたということだ

漣 ……(目を上げる)

民也 …そこへ行っていいかい…？君とあの少年の温もりを息遣いを匂いを…存在そのものを、僕は感じたいんだ…

* 民也、フレームから一步踏み出す。漕も踏み出そうとする。その時、玩具のお面をつけた男たちが乱入。手にしたヨーヨーを威嚇するように激しく突き鳴らす。

民也 何をする！

漕 来ては駄目！殺されてしまう…！

民也 こんなもの…！

* 民也、近づこうとするが、男たちの繰り出すヨーヨーに阻まれる。男たちの渦の中に、漕、だんだんと没していく。赤いヨーヨーを持った白い手だけが伸びる。

漕 …今宵、

民也 今宵？

漕 …夢で…

民也 待ってくれ！

* 漕と男たちのフレーム暗転。別のフレームにチンドン屋の男とじゃノ目が浮かぶ。

チンドン屋の男 どうしたんだい先生

じゃノ目 顔色が悪いですよ

民也 …僕はいったい何を見てるんだ…限りなく現実に近い夢、それとも夢に近い現実…

* 二人、大笑いする。

民也 何が可笑しい！？

チンドン屋の男 どっちだっていいじゃアねえかそんなもん

じゃノ目 見たいものを見りやアいい。生きたい時を生きりやアいいのサ

チンドン屋の男 選ぶのはあんた自身だよ先生

民也 …僕自身…

* 笛鉦太鼓。鳴り物が響き始める。

チンドン屋の男 おうおうおうおう、

じゃノ目 始まるわえ始まるわえ、

チンドン屋の男 芝居の幕が上がるよ先生

民也 そんなもの見たくもない！

じゃノ目 見なきや一生の損だよ先生（しなだれかかる）

民也 触るな！汚らわしい！（振りほどく）

じゃノ目 (嬌声を上げる)

チンドン屋の男 (拍子木を打つ) 東西、東西!

* 舞台が明るくなる。全てのフレームが舞台前面から奥に向かってずらりと並んでいる。それはまるで合わせ鏡の中の世界のようなのである。そしてその全てのフレームの中に、眷属の女たちが顔を伏せて座っている。

民也 ……これは……いったい……

女たち お待ちしていましたたわ先生

民也 え?

女たち 約束したでしょう。夢で会いましょう、と…

民也 ……

* 女たち、一斉に顔を上げる。チンドン屋の男、拍子木を打つ。奥のほうの女が一人、フレームを抜けてゆっくりと歩いてくる。滯である。

民也 ……君は……

滯 先生、

民也 ……僕の……

* チンドン屋の男、拍子木を打つ。舞台奥から、民也とそっくりな男が駆けて来る。男、背後から滯を抱きすくめる。

滯 せんせい…!

民也 違う! そいつは、

じゃノ目 駄目だよウ先生…

* じゃノ目、白い蛇に変じている。長い体で民也に巻きつく。民也、悲鳴を上げる。民也に似た男、滯の身体に大きな△を指で描く。

女たち まず三角を描きました

民也 離せ!

* 男、□を描く。

女たち 次に四角が降りてきて

民也 離してくれ!

* 男、○を描く。

女たち 最後に丸と結ばれた

滯 うれしい…

民也 違うんだ！

チンドン屋の男 (拍子木を打つ) 東西、東西！

常市 先生！

* 下手に常市が立っている。喧騒、一瞬にして止む。常市の明かりだけ残して舞台
暗転。波の音が、喧騒に変わって響く。

常市 先生！どこですか水野先生！

* 上手に明かりが灯る。民也がぼつんと一人、立ち尽くしている。

民也 …お別れだ、安齋くん

常市 行つては駄目です、水野先生！

民也 何故？…全てはここから始まるのに！

常市 先生！

* 民也、帽子を空中に投げる。常市、受け止める。

常市 …『八月二十日。晴れのち激しい雨。僕は行く。…僕は、行く』…

* 舞台、暗転。波の音が高く強く響いている。

△3V

* 舞台、再び転換して△1Vと同じ菜の花畑。柴田が、口笛を吹きながら竹箒で屋敷
の前の道を掃いている。板塀の穴に目を留め、辺りに人影がないのを確認して、
覗く。

柴田 …うひよ…こりやこりや…。(咳払い)…村の平和のために、やっぱり塞がにやなら
んな…。しかし村の男のシアワセを考えると…うーむ、難しい…

*と、下手から物思いに耽っている常市が歩いてくる。慌てて板塀から離れる柴田、
咳払いをする。が、常市、気づかない。

柴田 おうい、あんたあ、

常市 (気づかない)

柴田 (目の前で竹箒を振る) おい、おいってば、…やあッ！

* 柴田、竹箒で常市の尻をはたく。悲鳴を上げる常市。

柴田 やつと気づいたよ

常市 何をいきなり…あ、ああ、あの、

柴田 さつきは済まなかったな。いきなり叩いたりしてなあ

常市 そういう割には今躊躇なく叩きましたよね僕のこと。イタタタタ…

柴田 いたんだよ、ホントにでっけえ蛇。こんなの。真っ白でさあ
常市 はあ

柴田 凶々しい奴でなあ。逃げねえの。鎌首もたげてこっち睨んでるんだよ。だからこれで押さえつけて、火バサミで引っ搦んで、

常市 殺しちゃったんですか

柴田 いやー殺しはしねえよ。山に放してやったよ

常市 よかった。その蛇が死んで、恨まれるとしたら僕ですからね

柴田 また出てきても困るしな、俺は始末しようと言ったんだけど。奥様がなー：

常市 まあ女性は嫌がりますよね、殺したりするのは。普通

柴田 んま、それだけじゃねえけどな。あそこんちの場合

常市 はあ：

柴田 聞きたい？聞きたいだろ？

常市 いや別に

柴田 仕方ねえなー。ここだけの話だよ、

常市 別について言ってるのに：

柴田 …あそこの奥さんさ、ちよつと変なんだよね

常市 変？

柴田 病気を治すためつてさ、ここ来てるんだけど。どこも悪くなさそうでさあ。見た感じは。しょつちゅう出歩いてるし、この辺

常市 見た目じゃ分からない病気もたくさんありますよ

柴田 蛇やカエル見るたび大騒ぎするしな。そのくせどんな小さな虫でも殺すな言うし。じゃあせめて入って来ないように板塀の穴、塞ぎましようかって言うと、大切なものが見えるから塞がないでくれって言い出す。何だよ大切なものつてさあ

常市 …板塀の穴？

柴田 海見ちゃあぼーつと何時間でも突っ立ってるし。かと思うと一日中ノートになんだか描きこんでるし。ちよつと気味悪いよねえ。美人だけどさあ

常市 …その人、もしかして…。…玉脇濡…？

濡 …私に何か御用…？

*一瞬春の陽が翳り、大風が吹く。菜の花咲き乱れる中に、濡が立っている。

常市 (息を呑む)

柴田 (小さく悲鳴)

漣 …遠くに、捨ててきてくれたかしら。柴田さん

柴田 え、ええ、そりやもう、遠くく山々に、

漣 そう。…ありがとう(微笑む)…そちらは？

柴田 そうそう、奥さん奥さん、この人がほら例の蛇のこと教えてくれた人

漣 まあ。ご親切に、ありがとうございました

常市 …いえ

柴田 あそうだ、長谷川さんと呼ばれてたんだ。すっかり忘れてた。じゃ奥さん、また。じゃあな

* 柴田、常市の肩を一つ叩いて去る。漣と常市が残る。

常市 …何をそんなに見てるんです？

漣 …私の知っている方に、よく似てらっしゃるなと思って

常市 ご冗談を。水野先生に似ているなんて一度も言われたことありませんよ

漣 いいえ、似ているわ。顔かたちではなく…匂いが。…やっぱりあなた、先生のお身内の方なのね…

常市 いえ。でもお身内より先生に近い場所にいたと、僕は信じています

漣 …そう…。…なぜそんなに怖い顔をなさってるの

常市 …よくご存知のはずですが

* 常市、漣を睨む。漣、その視線を受け止め、

漣 …私は何もしてないわ

常市 よく平気でそんなことを、

漣 勘違いしないで。何もできなかったと、悔やんでいるのよ

常市 悔やんでいる？

漣 (頷く)

常市 僕は騙されない。あんたのせいで先生は死んだんだ。あんたに惑わされ振り回され、そして追い詰められたんだ。あんたさえいなければ、こんなことにはならなかったんだ！

漣 …私たち二人の間にあったことを、あなたが理解しているとは思えないわ

常市 そうやって逃げ延びるつもりだろうが、そう上手くは行かないよ。僕は全部知っている。先生が教えてくれたからね

漣 (不審そうに目を細める)

常市 (ノートを振り回しながら)「理解しているとは思えない」？馬鹿にしないでもらいたいね。なんだったら日付を挙げたっていいんだぜ。あんたと先生が会った日は、そのノートに書いてある、のね？

常市

漣 (笑い出す) あなたって正直な人ね。そういうところを先生も愛したのね、きっとうるさい！とにかく、

常市

漣 …私、二人きりで先生と会ったことなんて、ないわ…

常市

え？

漣 本当よ。いっだってそばに人がいた。…一夜だけでいい、二人きりで過ごしたかった…

常市

またぬけぬけと…！会ってるじゃないか、最後の夜に！

漣

…最後の、夜…

常市

先生の亡くなる前の晩だよ！去年の…八月二十日だ…先生…

漣

…

***常市、手で顔を覆う。二人、無言で立ち尽くす。雲雀が鳴いている。**

漣

あの夜、私、ここにいなかった

常市

…

漣

主人に連れ戻されて…東京にいたの

常市

そんな出鱈目、

漣

嘘じゃない。調べればすぐ分かるわ

常市

…。だけど先生は、

漣

分かってる。確かに先生と私はお会いしたわ。…現実ではないところで

常市

現実ではないところ？

漣

現実の裏っかわ…ひとが夢と呼ぶ場所で

***間。**

常市

…あんた。あんたおかしいんじゃないか、頭が

漣

何故？

常市

夢の中なんて…あり得ないだろう、馬鹿馬鹿しい

漣

…でも先生もそう書き残した…違う？

常市 先生は作家だ！虚構の世界に生きる人だったんだ！

漣 最後の夜のこと虚構だと？

常市 当たり前だろう！あんなこと、現実を起こるはずがない

漣 だから言っているでしょう。夢で会った、と

常市 いい加減にしてくれ！

漣 (吐息をつく) …どうしても信じてくださらないようね

常市 信じろというほうが無理だろう

漣 でも私は分かって欲しい。先生に愛されたあなたには

常市 しつこいよあんた！

漣 …

***漣、上手へと歩き出す。**

常市 ちよつと、どこへ、

漣 証拠を持って来て差し上げる

常市 証拠？

漣 …あの夜、確かに私たちが同じ夢の中にいたという証拠。それを見ればあなたも信

じてくださるはずよ、きつと

常市 待つて、おい、あんた…漣さん！

***漣、そのまま上手に消える。**

常市 …なんなんだ一体…。わけ分かんないですよ、先生…

***座り込み、頭を抱える常市。と、音楽。上手よりチンドン屋の男とじゃノ目が子**

どもたちを引き連れてやって来る。じゃノ目はバルーン細工を器用に作っている。

じゃノ目 ほうら、うさぎ

子どもC ありがとう！

子どもE ねえクワガタ作ってよ！

子どもB おれのロケットが先！

じゃノ目 順番、順番。ちよいとお待ち

***じゃノ目、バルーンを折り曲げる。思わず見とれる常市。**

常市 …上手いもんですねえ

チンドン屋の男 細くて長アいのものの扱いは慣れてるのサ、こいつは

常市 おじさん…。よかった、会えたんですね、探していた人と

チンドン屋の男

えらい難儀したけどな。遠オクに打っ棄られてからに

常市 はあ？

じゃノ目

エエ、全く、憎たらしいあの親爺…そらカブトムシ

子どもE

クワガタだよ！

じゃノ目

同じようなもんだらう。文句言う子にやあげないよ

子どもB

ねえロケット！

じゃノ目

アポロでいいかい

子どもB

はやぶさにして

じゃノ目

生意気だね。…けど本当に憎らしいのはあの女のほうじゃわい

チンドン屋の男

そうじゃそうじゃ、あの女

常市 あの女って、

チンドン屋の男

わしらをき、汚ねえものでも見るかの目つきサ。『嫌だ、怖い、気味

悪い』

じゃノ目

ほれ（バルーンを子どもに渡す）

子どもB

これははやぶさ？

じゃノ目

はやぶさははやぶさ

常市 だから誰です、それは

チンドン屋の男

そのの屋敷の女主人さ。決まってるだろ

子どもB

はやぶさに見えないよ

じゃノ目

文句言う子にややらないよッ！

子どもC

おばさん怖い

じゃノ目

おばさん言うな！

子どもC

キヤーツ！

子どもB

なあ、かくれんぼやろ

子どもE

やろやろ！

***子どもたち、遊び始める。**

常市 そんなにその…ひどい人なんですか？

チンドン屋の男

ひどいね

じゃノ目

血も涙もないね

常市 …綺麗な人、でしたけど

じゃノ目 綺麗なら毒の花でも触るかえ？

チンドン屋の男 死ぬとわかっていても食らうかい？

常市 …いえ

じゃノ目 そうそう、兄さん、もの分かりのいい

チンドン屋の男 余計な手出しはしねえこった。でないと誰かさんみたいになるでよ

う（男・じゃノ目、笑う）

常市 …何か知っているのか、あんたたち、

*** 男、太鼓をたたき始める。**

じゃノ目 （子らに）ほらほら。そろそろ行くよ

子どもD どこ行くの

常市 待てよ、水野先生のことを何か、

じゃノ目 いいところ。とてもとてもいいところ

子どもA 行こ

子どもC 行こう！

常市 おい、答えろよ、答えてくれよ！

じゃノ目 …蛇の道は蛇

常市 あ？

じゃノ目 …兄さんも一緒に行くかい…？

常市 …

*** 常市、じゃノ目に魅入られたようになる。そのまま子どもたちと一緒にふらふら**

歩き出す。と、上手より

光子 お待ちなさい！

*** 菜の花の坂の上に、大根を構えた光子が立っている。買い物帰りのようである。**

光子 ちよつとあんたたち！子どもをどこへ連れてく気！？

チンドン屋の男 いやそのちよつと、

じゃノ目 隣町までね、

光子 そっちに町なんかいいわ。山が深くなって崖に突き当たるだけよ

じゃノ目 あるのさ違う町が

チンドン屋の男 崖の向こうに遠い町がね

光子 誤魔化さないで！いいわ警察を呼ぶから話はそこでしましょう（携帯を取り出

す)

チンドン屋の男　おい行くぞ！

じゃノ目　連れてかないのかえ

光子　もしもしッ！？もしもしッ！

チンドン屋　諦める。分が悪い

光子　警察ですかっ！？

じゃノ目　ええい…この貧乳！

光子　なんですすって！？

***男、じゃノ目、走り去る。光子、吐息をつく。**

光子　…行った…よかった…。みんなも駄目じゃない、知らない人についてったりしちや

子どもB　でも風船くれたよ

光子　風船くれても。さ、みんなお家に帰ろ。お母さんが心配してるよ

子どもE　はい

子どもD　もつと欲しかったな

***子どもたち、散り散りに去る。ぼうつと立っている常市。光子、目の前でパンと手を叩く。**

常市　うわ！なななんですか、

光子　何やってんの、あなた！大の大人がついていて、

常市　はあ？

光子　不審者にあやうく攫われるところだったじゃない！

常市　そうだったんですか？

光子　あなたね、今日の前で、

常市　…途中から…ぼうつとして…よく覚えてないんだ…

光子　…ちよつと大丈夫？お酒でも飲んだの？

常市　飲んでないよ、そんなもの…（倒れかかる）

光子　あぶない！（支える）

常市　…なんだろ…ふらふらする…

光子　やだー貧血？情けないなあ男のくせに

常市　男のくせには余計だよ…

***二人、なんとなく抱き合う格好になってしまう。**

光子 …。少し横になったほうがいいんじゃない？うちすぐそこだから、
常市 あの家には行きたくない！（体を離す。ふらつく）

光子 ほらあ、（支える）

常市 …嫌だ…あの女の世話になるのは…

光子 そんなこと言ったらって、

常市 …お堂に、

光子 え？

常市 お堂に運んでください…

光子 そんな勝手に、

常市 大丈夫…源信さんならきつと許してくれる…

光子 …仕方ないなあ…

*光子、常市に肩を貸す。そのまま一人下手に歩いてゆき、一旦去る。二人が去ったあと、ややあつて、スケッチブックを抱えた滯が上手からやってくる。

滯 …あら…。…帰ってしまったのかしら…

*滯、菜の花畑の横に座りこむ。そのままじつと前方を見つめる。と、陽が翳り、風が急に強くなる。菜の花畑が揺れる。揺れて割れた菜の花の中に、民也が立っている。

民也 …みお…滯…

滯 …先生？

民也 滯…どこだ、み、お…

滯 先生！どこにいるの先生！？

*滯、振り向く。民也を見つける。

滯 先生！…そんなところにいらしたの…

民也 …滯…僕の、永遠の女…

滯 待ってて。すぐに行くわ、先生、

*大風が吹く。民也の姿が揺れる。

滯 行かないで、先生！

*滯と民也の間に広がる菜の花が、まるで波のように揺れる。その波に滯、飲み込まれる。大風が収まると、明かりの中に源信のお堂が浮かぶ。コップの水を飲み干している常市。その横に光子の姿が見える。

常市 （大きな吐息をつく）

光子 どう？少しは落ち着いた？

常市 うん：ありがとう。：あの、あなた、

光子 宇津木です。宇津木光子

常市 安齋常市と言います。東京の出版社で働いてます

光子 ；出版社：もしかして去年亡くなった作家さんの、

常市 ；（頷く）

光子 ；それでここへ：。：お参りはできましたか？

常市 ；いや、まだ：

光子 ；

***間。**

常市 宇津木さん、玉脇さんの家で働いてるんだよね

光子 ええ

常市 ；変わったことなかった？その：作家さんがここに滞在してた間。濡さんの素振りに：

光子 ；

常市 何でもいいんだよ。何か知らない？濡さんが夜出かけてたとか、誰かから連絡があったとか：。？宇津木さん、

光子 ；誰になんて言われたか知らないけど、これだけは言っとくわ。奥様、濡さんは、あなたの想像しているような人じゃない。絶対

常市 しかし、

光子 確かに普通とはちよつと違う人よ。でもそれは濡さんのせいじゃない。濡さんは：濡さんは：

常市 ；何かあるんだね。：事情が：

光子 （常市の目を見る）

常市 やっぱりね。そうじゃないかとは思ってたんだ。：教えてもらえないかな、彼女が抱えている事情とやらのことを

光子 ；そんなの、他人に話せるわけないでしょう

常市 ；。あなたも知っている通り、去年の夏、この海で一人の作家が死んだ。その作家は：僕にとってかけがえのない存在だった。あなたにとっての濡さんのように

光子 ；

常市 え！？やっぱり、

光子 でも！二人の間には何もなかったと思うわ

常市 そう思い込んでるだけで、

光子 あの夏は、ご主人とそのお友だちがよく遊びに来ていたの。荒っぽい人もいたから、きつと濡さん、先生を巻き込みたくなかったんだと思う。…例え自分の気持ちを殺すことになっても…

常市 …

光子 …それが二人にとって幸せなことだったのかどうか、今となっては分からないけれど、ね…

常市 …

* 光子、お堂から去る。常市、柱の和歌に目をやる。

常市 …『うたた寝に恋しき人を見てしより 夢てふものは頼みそめてき』か…

* 小走りで舞台を横切る光子、歩いてきた源信とぶつかりそうになる。

源信 おっと！すいません、

光子 …（源信を睨む）

源信 あ、宇津木さん。こんにちは。いいお日和ですね。…？宇津木さん？

* 光子、中指を立てる。

光子 Fuck You!

源信 はあっ！？

光子、走り去る。源信、一瞬あっけに取られたあと、苦笑いする。そのままお堂に向かう。

源信 ただいま帰りました。（常市の様子を見て）どうしました？

常市 あ。すみません。ちょっと休ませてもらってました

源信 あーそのままそのまま。どうせ誰も来やしませんから。ゆっくりしてってください
常市 ありがとうございます

源信 どこかお具合でも？

常市 …短い時間にいろんなことがあったので、ちょっと混乱してるのかもしれない

源信 …そうですか…

* 間。

源信 …玉脇さんとこの光子さんと、お話になりませんでしたか？

常市 話しました。実はついさっきまでここに、

源信 やっぱり

常市 ?なにか?

源信 (苦笑する) 嫌われてしまったようです。村では貴重な若い女性に…

常市 え、

源信 私が、濡さんの悪口を言いふらしてると思ってるんでしょあ

常市 …ああ…

***間。**

常市 …。源信さん。実は僕もすっかり参ってしまいました。この日記を読めば読むほど、そして濡さんと話せば話すほど、わけが分からなくなってきました…

源信 …

常市 あの二人の間に、いったい何があつたのか、あるいはなかったのか。…もう僕には、何がなんだか…

源信 …

常市 …僕まで、悪い夢でも見ているようです…

***常市、ノートを畳に置く。間。**

源信 …情けない

常市 え、

源信 それで諦めてしまうおつもりか。先生が、いったいどんな気持ちであのノートをあなたに託したと…!

常市 …

源信 …私は、先生をお助けすることができなかった…一番近くにいながら、何もできなかったんです…。…だから安齋さん、せめてあなたに…あなたに、先生の無念を晴らしていただきたいんです…

常市 …源信さん

源信 安齋さん。その日記の中に、きっと解決の糸口があるはずです。先生は、あなたがこれを読めばきっと分かってくれると信じていた。だからこそあなたにノートを残した。違いますか?

常市 …ええ…そう思います

源信 だったらもっと丁寧に追って行きましょう。先生の残した足跡を。及ばずなが

ら私もお手伝いしますから…

常市 ……ありがとうございます

源信 ……何か、気づいたことはないですか？読んでいて「これは」と思ったことは、

常市 ……そうですね…

源信 ……なんでもいいんですよ。なにかひっかかることはありませんか

***常市、ノートをめくる。あるページで手が止まる。**

常市 ……『永遠の女』…

源信 『永遠の女』？

常市 水野先生の、創作のテーマの一つなんです。『永遠の女』というのは…先生は幼い頃、好きだったお母さまを病気で亡くされていて…その衝撃が先生を生涯支配していたんだと思います。一種の女神信仰とでも言うのでしょうか、母であり恋人であり女神でもある、そんな絶対的な『永遠の女』というものが、この世には存在する、自分はその女とめぐり合う運命にあるのだ、という信念をお持ちで…お書きになるものにも、その考えは色濃く反映されていたと思います

源信 ……さすが、担当編集者は違いますね

常市 ……いえ、そんな…。…でもそう思って読んでゆくと、先生が澤さんをその『永遠の女』
と思っ込んでしまったのでは、という推測が成り立ちます

源信 ……なるほど…それで先生は、何とかして彼女と結ばれようとした？

常市 ……でも、実際に二人きりで会ったことはないと言います。会いもしない男女がここまで愛し合えるものなのか…そこらへんがどうにもよく分かんないんです

源信 ……（柱の和歌を見ながら）あるいは、先生は、やはり夢に取り殺された…？

常市 ……そんな源信さんまで！やめてくださいよ、非現実的な、

源信 ……非現実的…やはり、そうでしょうか

常市 ……二十一世紀ですよ、今は

源信 ………そうですね、すみません。…また本物の粗茶でもいれますか

***源信、立ち上がる。と、お堂の入り口の戸が揺れる音がする。**

常市 ……なんだろう

源信 ……どなたかいらしたかな…

***源信、入り口に向かう。スケッチブックを抱えた澤が倒れている。びしょぬれである。**

源信 どうした！？しつかりなさい！

漣 （気を失っている）

常市 どうしました？

源信 漣さんが、

常市 ええ！？

* 常市、慌てて入り口に向かう。二人で漣を助け起こす。

常市 漣さん！漣さん！

源信 なんだこれは、びしょ濡れじゃないか！

常市 どうしましょう、

源信 とりあえず上に運びましょう。いいですか、ゆっくり、そうと…

* 二人、漣を運び上げ、寝かせる。

源信 驚きましたね。話題の主がいきなり現れるとは

常市 なんでこんなに濡れて…雨も降ってないのに、

源信 とにかく玉脇の家知らせましょう。私ちよつと行って来ます

常市 僕も、

源信 いや誰か残っていないとまずい。安齋さんはここで見ていてください

常市 あ、はい、

源信 すぐに戻りますよ

* 源信、お堂を飛び出し、上手の玉脇家に向かう。残された常市、眠る漣の顔をじつと見つめる。

常市 …不思議な人だね。あなたは、本当に…

* と、漣の目がぱつと開く。驚く常市。

常市 漣さん、

漣 …どこ…？

常市 え？ああ、ここはお堂だよ、源信さんのお堂、

漣 違う…あの人、どこ？

常市 あの人？誰のことを、

漣 （上体を起こす）…探さなきゃ…

常市 ちよつと漣さん、

漣 あの人が待ってる…！

常市 無理だよ、そんないきなり、

常市 *と、外からチンドン屋の鳴り物が聞こえてくる。漣、耳を塞いで悲鳴を上げる。
どうしたの!?

漣 あの音!あの音が!あの人を連れてってしま!私の手の届かないところへ!
常市 チンドン屋じゃないか、

漣 違う!あれはもつと禍々しいもの...!

*漣、錯乱したように暴れる。常市、体で押さえ込もうとする。

常市 落ち着いて!漣さん、落ち着いてください!

*と、澄んだ子どもの声が響く。同時にチンドン屋の音、消える。

少年 もういいかい?

漣 ...だれ?

少年 もういいかい?

漣 そこにいるのは誰!?

常市 漣さん!

*漣、お堂の障子を開け放つ。外に、少年が一人立っている。

漣 ...あなたは...

少年 やっぱり誰もいないんだ...。ねえ、みんな見なかった?かくれんぼしてたんだけど

漣 ... (首を振る)

少年 どこ行っちゃったのかなあ。またぼくだけ置いてけぼりかなあ...

常市 ...きみ、きみもうお家に帰りなさい。そろそろ日も暮れてくるし、

少年 お家、ないよ

常市 え、

少年 ぼく、お家なんてない。ここ、知らないところ

常市 ああ、この村に遊びに来たんだね。だったらお母さんと、

少年 ...お母さん、いない

常市 いないって、

少年 ...雪が降ってる夜、出て行っちゃった。アパートのドアに鍵かけて。だからぼく、
ベランダに出て、お母さんが帰ってくるの、ずっと待ってた

常市 雪?鍵?ベランダ?

少年 ベランダで遠くのほうの屋根数えてたら、賑やかな音楽が聞こえてきて...気づ

いたらいつのまにかここにいたの

常市 待つて、じゃきみ、家出少年？いやその前にママが鍵かけてって、

少年 …ぼくの友だちはどこ？家はどこ？…お母さんはどこ…？

* 少年、泣き出す。漣、走り降りて抱き締める。

漣 …泣かないの。ね。大丈夫。きつと見つかるから…

少年 ほんとに見つかる？

漣 見つかりますとも。そうだ…

* 漣、スケッチブックを開き、1ページ破り取る。そこには「○□△」が描かれてある。

常市 (息を呑む) その絵は…

漣 (少年の手に握らせる) これを持っていらっしやい。きつとこのことづけが、あなたを導いてくれる。私の捜し求める人も、きつと同じところにいるはずよ…

少年 これを持ってればいいの？

漣 そう。持つてるだけでいいの

少年 そしたらお母さんに会える？

漣 会えるわ。きつと会える…

少年 ありがとう！

* 少年、明るい笑顔になり、駆け出してゆく。漣、後を追おうと立ち上がる。

常市 (漣の腕を掴む) 待つて！漣さん、あれは、

漣 …そう。あれがあなたに見せたかった『証拠』…先生と私が同じ夢の中にいたという…

常市 …

漣 (空中に指でなぞる) 『○□△』…『○□△』…あの人私の体に刻みつけようとしたしるし…

常市 あり得ない！夢の中でなど、

漣 離して。…あの子のあとを追いかけてなくちゃ…！

常市 漣さん！

* 漣、常市の腕を振り解いて駆けてゆく。常市、そのあとを追いかけてゆく。誰もいなくなった舞台。ややあつて、上手から源信と光子が話しながらやってくる。

源信 だから誤解ですって

光子　じゃあなんで安齋さん、あんなこと言い出すんですか！？
源信　私は、私の感じたことを正直に申し上げただけです！

光子　それが邪推だと言うんです！お坊さんのくせにとんでもない人ね！
源信　あのねえ、

光子　（お堂に飛び込む） 濡さん！大丈夫ですか濡さん！…あれ？

源信　あ？…いない。…濡さん！安齋さん！

光子　ちよつとお。本当に濡さん倒れてたの？

源信　本当ですよ。びしょびしょに濡れて。ほら座布団、濡れてるでしょう

光子　ホントだ…え、じゃあどこに、

源信　おかしいな…さつきまで二人ともいたんだが…

光子　（外を見る） 源信さん！源信さん！（ぼしぼし叩く）

源信　痛い痛い痛い！

光子　見て！ほら、濡れた足跡が、ここからずっと、

源信　ああ、確かに。ずっと…山のほうへ…

光子　山？こんな時間に山へ？

源信　…（破られたスケッチブックを見つける）

光子　心配だわ。探しに行きましょう、源信さん。…源信さん！

源信　（はっと気づいて） いや我々二人だけでは、

光子　なに悠長なこと言ってるのよ！

源信　誰かに知らせたほうがいい、

光子　あのねえ、

*と、チンドン屋の音が響く。不安を掻き立てるような、なんともいえない不気味な響き。光子と源信、知らず知らず寄り添う。

源信　…あなたの言うとおり、急いで探したほうがよさそうだ…

光子　…行きましょう…！

*二人、山へ向かって去る。チンドン屋の音が残り、響く。暗転。

△4▽

*波の音が響く。溶暗。乱立する巨大な○□△のフレーム。そのフレームが動いている。少年がまず現れ、フレームをくぐりぬける。続いて濡が、そして常市がそのあとに続く。まるでサーカスの輪くぐりのよう。

常市 待つて、漣さん！

漣 見つけなくては。今度こそあなたを、

常市 どんどん暗くなる！

漣 とらえなくては。今度こそこの手で、

常市 ちくしょう！

漣 どこにいるの！？返事をして！

チンドン屋の男 ここだよ、ここにいるよう

漣 先生！

常市 違う、あれは、

じゃノ目 ここよ、坊や

少年 お母さん！

常市 そっち行っちゃ駄目だ！

*男、じゃノ目、笑いながら消える。漣と少年、追いかけて消える。

常市 待つてッたら！

*常市も同じフレームに消える。同時に別のフレームに光子と源信が現れる。

光子 漣さーん！

源信 安齋さーん！

光子 いない！

源信 おかしい。そんなに離れてはいないはずなんだが！

光子 ！もしかして、もう山にはいないのかも、

源信 しかし足跡は確かに、

光子 だから！山を抜けて、

源信 ！海へ？

光子 ！（頷く）

源信 ！。行ってみよう

*光子、源信、フレームを通って消える。同時に別のフレームに、民也と少年の母のふりをした眷属たちが次々に現れる。少年と漣、眷属たちを追いかける。その二人を追う常市。

眷属A こっちだ

眷属B 坊や

少年 お母さん、

漣 先生、

常市 やめろ！

眷属C 何をしている

眷属D 見えないの

漣 どこ、

少年 どこにいるの、

常市 違うんだ！

眷属E 早く

眷属F 早くおいで

漣 会いたい、

少年 置いてかないで、

常市 騙されるな！

眷属G 会いたい

眷属H 会いたいわ

チンドン屋の男 だから早く

じゃノ目 こっちへおいで…

少年 お母さん！

漣 …先生！

***眷属たちのフレームが一つに重なる。『〇□△』が出来上がる。**

少年 同じだ！ぼくの持つてることづけと同じ！

漣 …先生…やっと、会える…

常市 漣さん！

***少年と漣を飲み込んだフレーム、岩戸のように閉じていく。その戸を叩く常市。**

常市 開けろ！漣さんと子どもを返せ！

じゃノ目 …お前も一緒に来るかえ…？

常市 あ？

チンドン屋の男 暗い暗い地の底へ、

じゃノ目 いっそ…お前も来るが良い…

***男、いざなうように太鼓を叩く。じゃノ目、常市を招く。術にかかり、歩き**

出す常市。岩戸が開き始める。光子と源信、飛び出す。

光子 危ない！（常市を抱きとめる）

チンドン屋の男 何をする！

源信 南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧！

* 男、じゃノ目、悲鳴を上げる。

じゃノ目 エエ憎たらしい！

チンドン屋の男 だが…わしらの勝ちじゃ！

* じゃノ目、男、哄笑しながら、岩戸の隙間に飛び込んで消える。

源信 なんだあれは…！

光子 安齋さん！しつかりして！

常市 …光子さん…どうしてここに…？

光子 お堂から追いかけてきたの。ね、濡さんは？濡さんはどこ？

常市 …あの岩穴の中に…飲み込まれてしまつて…

源信 岩穴に？（調べ始める）

光子 飲み込まれたつて…どういうこと？あいつらはいったい何？

常市 （首を振る）

源信 …おそらく妖かしの類だろう

光子 妖かし？妖怪つてこと？

源信 そのようなものです

光子 あり得ないわ。非科学的すぎる！

源信 世の中には科学で説明できないこともたくさんあるんですよ…坊主になってみて、初めて私にも分かりましたが

光子 …

常市 …行かなくちゃ…

光子 ちよつと、

常市 …濡さんが危ない…

光子・源信 …

常市 ありませんか、隙間かなにか、

源信 …探してみましよう

* 常市、源信、岩戸を調べる。そんな男たちをじつと見つめる光子。

源信 あ、

常市 ありましたか、

源信 ここを、

常市 本当だ

源信 狭い割れ目ですが、一人ずつ進めば…

常市 …試してみる価値はありそうですね…

*** 常市、体を差し入れようとする。その常市を押しつけて光子が先頭に立つ。**

常市 光子さん、

光子 私が先に行きます

常市 え、

源信 何を馬鹿な、

光子 私の体が一番小さいわ。だから、私が進めなくなったら、引き返して別の道を探せ

ばいい

常市 …光子さん…

光子 …もし嵌っちゃったら全力で助け出してよね

源信 もちろんですとも

光子 (にっこり笑い) じゃあ行きましょうか

常市 はい

*** 三人、フレームの中に消えてゆく。**

*** 暗闇の中、興奮したざわめきが聞こえる。蠟燭の明かりがぼつぼつと灯る。その明かりに照らされて、墨染めの観衆が集っているのが見える。**

闇の観衆A まだかいな、まだかいなア

闇の観衆B あと少しじゃ

闇の観衆C 辛抱しなされ

闇の観衆D ほれ、なにやら幕の向こうが、

闇の観衆E 熱を孕んで来ましたぞ…

*** 闇の観衆たち、踊り出す。光子、常市、源信、その踊りの輪の中に現れる。**

光子 …なに、これ…

源信 …驚いた…こんなところに出るとは…

常市 …現実の裏っかわ…

源信 え？

常市 ……さつき澪さんが言っていたんです。先生と会っていたのは、現実の裏っかわ、ひとが夢と呼ぶ場所だ、と…。…あの時は信じませんでした。が…

源信・光子 ……

常市 ……どうやら、澪さんは本当のことを話してくれたようですね…

光子 じゃやっぱり澪さんはここに？

常市 たぶん。いやきつと

源信 探しましょう。澪さん！

光子 澪さん！

闇の観衆C シーツ！

闇の観衆A うるさい！

闇の観衆E 静かに！

光子 なによあなた達、

闇の観衆B もうすぐ幕が開くのじゃ

闇の観衆D 大人しく待っておれ

常市 幕？

源信 一体何の、

* 闇の観衆A、どん、と足を踏み鳴らす。続いてBCDE、どん、と踏む。どん、どん、どん、どん。他の観衆達も合わせて踏み鳴らす。

光子 やめて！

常市 頭が痛い！

源信 耳を塞いで！聞いてはいけない！

* 笛鉦太鼓。鳴り物が響き始める。続いて拍子木の音。観衆の前方の闇の中に、緞帳がゆっくりと浮かび上がる。

チンドン屋の男 東西、東西！

* 拍子木に合わせて緞帳がゆっくり上がっていく。再び合わせ鏡の中の世界が出現する。フレームの中で、眷属の女たちが顔を伏せて座っている。舞台下手には眷属の女の膝で眠る少年が見える。と、奥のほうの女が一人、フレームを抜けてゆっくりと歩いてくる。澪である。まるで文楽人形のように背後のじゃノ目に操られている。じゃノ目は白い蛇身に変じている。

常市 濡さん！

光子 蛇が！

源信 南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧！

じゃノ目 (哄笑) 馬鹿め！

チンドン屋の男 変化(へんげ)した我々に念仏など効くものか！

*男、頭巾を取る。巨大なガマガエルに変じている。光子、悲鳴を上げる。男、拍子木を打つ。舞台奥から、民也とそっくりな男が駆けて来る。男、背後から濡を抱きすくめる。闇の観衆達、熱狂する。

濡 せんせい…！

常市 違う！先生じゃない！

光子 どうしよう、どうしよう！

源信 こうなったら、

*源信、常市、舞台上ろうとするが、闇の観衆に阻まれる。

常市 離せ！

源信 離しなさい！

じゃノ目 駄目だよあんたら…

*観衆達、蛇に変じている。長い体で三人に巻きつく。もがく三人。民也に似た男、濡の身体に大きな△を指で描く。

全員 まず三角を描きました

常市 やめろ！

光子 濡さん！

*男、□を描く。

全員 次に四角が降りてきて

源信 くそう…

*男、○を描く。

全員 最後に丸と結ばれた

濡 うれしい…

チンドン屋の男 (拍子木を打つ) 東西、東西！

常市 先生！水野先生！

民也 …ぼくは、ここだ…

*一段高いところに民也が立っている。喧騒、一瞬にして止む。波の音が喧騒に変わって響く。

常市 ……先生！

源信 水野先生……！

民也 どこだ安斎くん……きみの声が聞こえる。そして漣の声も。だが、暗くて、どうしても君たちの姿が見えない……

漣 ……せん、せい……？

民也 (必死に探す) 漣！会いたい、きみに会いたい……！僕の……永遠の女……！

漣 今行きます！

*漣、走り出そうとする。じゃノ目、漣に巻きつく。漣、悲鳴を上げる。

じゃノ目 そうは行くかい！

男 ようよう手に入れた獲物だ

じゃノ目 なんとしてでも連れて帰るワ

漣 離して！

光子 漣さん！

漣 光子ちゃん！あなたまで……！

男 長居は無用。行くぞ

じゃノ目 あいよッ！

漣 先生！

民也 漣！

常市 やめろ！

光子 漣さん！

漣 先生！

民也 漣！

*民也に似た男、漣を引きずって連れ去ろうとする。二人の距離が広がる。と、膝枕で眠っていた少年、ぱっと立ち上がる。

少年 えいっ！

*少年、紙飛行機を民也に向かって飛ばす。それは、漣から預かった「ことづて」。紙飛行機、闇を切り裂いて飛び、民也の元へ届く。

少年 (にっこり笑って) それ、おじさん宛てでしよう？

民也 …きみ…

少年 よかった…届いて…

民也 …ありがとう…

* 民也の背後から清浄な青い光が射す。

じゃノ目 眩しい！

男 闇だ！闇を広げろ！

民也 濤…

濤 先生、

民也 …そこにいたのか、濤…。…僕の、永遠…

* 青い光、舞台を染め上げる。眷属たち、観衆たち、悲鳴を上げて舞台から消える。

じゃノ目 ちくしょう…！

民也 …帰りなさい。お前たちの棲む世界に

男 なにをウ…

民也 この場所に、闇はいらない…

* じゃノ目、男、一声叫んで舞台上から消える。解放された常市たち、その場へ
たり込む。と、少年が歓声を上げて民也の元に走ってゆく。

民也 …きみのおかげだよ

少年 ねえぼくも一緒に連れて行って！

民也 きみも？

光子 だめ！

源信 先生、その子は、

少年 いいの。…ぼく、思い出したよ

常市 思い出した？

少年 …ベランダで屋根を数えてるうちに、ぼく、すごく眠くなっちゃって…いつのまにか寝ちゃったみたい。お母さんにまだ『おやすみ』って言ってないのね…

光子 そんな…

常市 じゃ、じゃ、きみはすでに、

源信 …この世のものではない、のか…？

* 民也と少年、手を繋いで立つ。まるで父子のようである。濤、立ち上がり、二人の元へ向かおうとする。

常市 滯さん！

光子 行かないで！滯さん、行かないで！

滯 今まで本当にありがとう、光子ちゃん…

源信 戻って来い！

滯 (首を振る) いいえ…私が戻るべきはこつちの世界…

常市 行つては駄目だ！滯さん！…滯さん！

滯 何故？…全てはここから始まるのに…！

常市 滯さん！

* 滯、民也の横に立つ。

滯 …ようやく…会えた…先生…

民也 …ずいぶん待たせたね…すまない…

滯 いいえ…いいえ…！

* 民也、滯を抱きしめる。その姿を、少年、眩しそうに見つめている。光子、泣いている。源信、手を合わせている。

常市 …先生…

民也 …今度こそ本当にお別れだ、安齋くん…

常市 …え、

滯 光子ちゃん…元気だね…

光子 滯さん！

民也 …きみには、きみの世界が待っている…

常市 先生ーッ！

* 波間の光のような煌きが舞台を満たす。波の音が高く強く響く。ゆっくりと、暗転。

△跋▽

* 穏やかな鳥の囀りが聞こえる。溶暗。舞台は一面の菜の花畑。あれから数週間後の午前中。柴田がそわそわしながら歩き回っている。

柴田 ここだと思ったんだけどなあ…いねえなあ…

* 柴田、お堂を覗き込む。

柴田 おつかしーな…。どーこ行っちゃまったんだろ…

* と、下手から、常市と源信の笑い声がする。

柴田 お。…よっしやよっしやよっしやー！

* 柴田、小走りで上手の屋敷に消える。同時に下手から、民也の帽子をかぶり、ボストンバッグを提げた常市が歩いてくる。もう片方の手に、丸めた懐紙を持って
いる。隣りに源信の姿がある。

常市 すみませんでした、最後の最後に無理を言って

源信 なんのなんの。常市さんの頼みとあれば…

常市 …一緒に、持っていたほうがいい気がするんです

源信 …あのノートと？

常市 (頷く) 最後のページに、挟んでおこうと思います

* 常市、懐紙を広げる。

常市 …『うたた寝に恋しき人を見てしより』

源信 …『夢てふものは頼みそめてき』…

* 間。

常市 …本当に、夢を見ているみたいだったなあ…

源信 自分が経験していなければ絶対に信じられませんよ

常市 経験してもまだ半信半疑で…

源信 (帽子に目をやり) でも、夢ではなかった…

常市 …そうですね

* 間。

源信 …似合いますよ、その帽子

常市 東京に戻ったら脱ぎます

源信 そんな勿体ない

常市 (笑って) まだまだ、僕なんかかぶるには恐れ多すぎて

源信 …ではまた来るがよろしかろう。帽子と釣り合うような人物になれたか、拙僧が見
て進ぜよう

常市 よろしくおねがいたします

* 二人、笑う。と、上手から駆けて来る人影。柴田である。

柴田 常市さあん！常市さあん！

常市 柴田さん、

柴田 忘れ物、忘れ物！

常市 忘れ物？

柴田 そうそうでつかい荷物一つ！

常市 部屋は最後に全部見たけど、

***と、屋敷の方から巨大なバッグを抱えた光子がやって来る。**

光子 なかったわよお柴田さん、忘れ物なんて…あ！

常市・源信 光子さん！

光子 …柴田さん！（睨む）

柴田 （口笛を吹いている）

光子 もう…とぼけちゃって…

源信 もしかして光子さんも、今日、

光子 たまたまね！たまたま偶然、帰ろうと思って予約したら今日の、この時間の便しなくて、

柴田 たまたま偶然ねえ…

光子 なによ！

常市 …。…帰るんですか、東京に

光子 …いつまでもここにいられないもの

常市 …

源信 そうか…ますます淋しくなるなあ…

***間。**

柴田 …また来たらしいさ！

光子 …柴田さん

柴田 光子ちゃん、実家も東京なんだろう。だったら、ここを自分の故郷だと思って、また帰って来りゃあいい、そしたら、

光子 …

柴田 …そしたら奥さんも淋しくないだろ…

光子 …うん

***海鳴りが一段、高くなる。海を見つめる四人。**

柴田 …しっかし不思議なこともあるもんだよなあ。去年、作家先生が見つかったのと、まったく同じ岩場で、なんてなあ…

光子・常市・源信 …

柴田 しかも、遠くの、北の町の子どもが一緒について…いったいどういうことかねえ…
源信 …そうですね

柴田 …けど、一番不思議なのはさ…。…二人とも、幸せそうに笑ってたってことだよね
え…

源信 …ええ…

光子 …幸せそうに…

常市 …笑ってた…

***初夏の日差しを受け、海が煌く。**

常市 …海が…

源信 …海が？

常市 …夏の青に変わりましたね…

源信 ああ、本当だ…

光子 …また夏が来るのね…

源信 …ええ。何度でも何度でも…夏は巡って来ますよ…

***間。**

常市 …そろそろ行かなくちゃね

光子 え、

常市 時間。列車の

光子 あ。…うん

***常市、光子の巨大なバッグを持つ。**

光子 いいわよ、自分で持つから

常市 いいよ

光子 でも、

常市 …一緒に、帰ろう

***常市、まっすぐに光子の目を覗き込む。**

光子 …。…うん

常市 じゃ、失礼します

柴田 うんうん、

光子 源信さんも柴田さんもお元気で

源信 気をつけてお帰りなさい

柴田 またおいでよ、本当にな

光子 ありがとう

常市 …さようなら

光子 さよなら

* 常市、光子深々と頭を下げる。応える源信と柴田。やがて二人、ゆっくり上手に消える。その姿をずっと見ている源信と柴田。

柴田 …さアて、と。森本さんちの草むしりに行くかな

源信 ご精が出ますね

柴田 貧乏暇なしよ

源信 ちよつと一服、お茶でもいかがです？

柴田 お、いいねえ。ちよつと喉が渴いてたんだよ

源信 本物の粗茶ですけどね

柴田 粗茶に本物も偽物もないだろう

源信 確かに

* 源信と柴田、笑いながら上手に去る。誰もいなくなった舞台。ただ菜の花だけが風を受けて揺れる。黄色の海原に海鳴りが遠く響き、ここに、幕は、下りる。